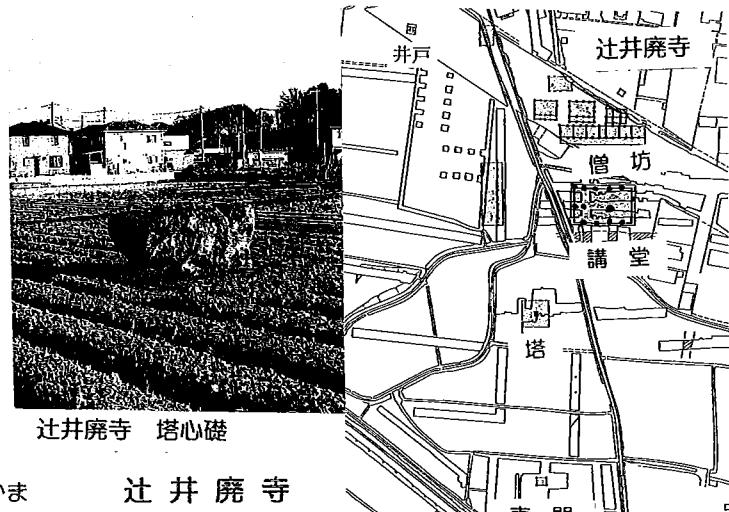


播磨の古代寺院と造寺・知識集団 15

飮磨郡の古代寺院・続

一 市川流域の古代寺院を歩くー

寺岡 洋



前回に続き市川（いちかわ）流域・飮磨郡（しかまのこおり）の古代寺院跡、古代寺院想定地、塔心礎、草上駅家（くさかみのうまや）想定地、国分寺などを周ります。姫路ではJR姫路駅構内の観光案内所と駅で自転車を借りることができ、じつに便利。

平野廃寺塔心礎（船場本徳寺庭内）

まず、駅から北西へ1km弱、船場本徳寺へ。約6千坪という広い境内に、享保3年（1718）に落慶した雄大な本堂が建つが、建物の傷みが目につく。明治天皇の行在所が残り、ドイツ人捕虜収容所も置かれたという姫路の名刹。

寺務所でお断りし、黒書院と白書院の間の庭に置かれた塔心礎を確認。心礎は平野廃寺から移されたと伝えられる。書院も庭も荒れていた。

平野廃寺はおおよそ3kmばかり北、広峰山の麓に想定地があるが、寺院の詳細は不明。

見野（みの）廃寺塔心礎（姫路文学館庭内）

船場本徳寺から船場川沿いに約1km弱、修復工事中の姫路城天守を右手に眺めながら北上する。姫路文学館は安藤忠雄氏設計の建物と、移築された和風建物（望景亭）が丘の中腹に建つ。

心礎は庭園の待合（まちあい）の向かいに置かれている。手水鉢として使われ少し高い位置にあるので、座敷の廊下から見るのがいい。

見野廃寺跡は市川下流の左岸で、海岸に近い。寺域想定地が調査され、遺構は開墾や粘土採掘によって壊滅状態であることが確認された。

『日本靈異記』第十一には、飮磨郡の濃於（のお）寺が登場し、寺の辺に漁師が住んでいる。飮磨郡で海岸近くの寺といえば、見野廃寺しかなく、見野（みの）と濃於（のお）は音もいくらか似通うが……。蛇足だが、この漁師は桑畑をもっており、濃於寺周辺の景観の一端がうかがえる。

辻井廃寺

辻井廃寺の位置と現状

姫路駅から西北へ約3km、播磨国府跡とされる本町遺跡からでも西へ約3km、夢前川（ゆめさきがわ）と市川の中間くらいの平地。旧夢前川の氾濫原に立地し、寺域の東では幅50m以上の旧河道跡が調査されている。安室バイパス新設工事により調査が行われ、道は寺域をかすめる。

現状は道路の開通により市街化が進んでおり、塔心礎周辺のみに田園が残っている。

戦前から巨大な塔心礎や礎石、夥しい古瓦の出土により古代寺院の存在が知られ、鎌谷木三次氏により比較的詳しい記録が残されている（『播磨上代寺院跡の研究』1942年）。

周辺は、風土記の「巨智里（ごちのさと）草上村」に比定されている。『和名抄』では、草上（久佐乃加三）郷になる。また、山陽道の草上駅家（うまや）が存在したことが、『続日本紀』、『延喜兵部式』などにより確認される。

辻井廃寺の遺構（図版参照）

辻井廃寺は姫路市教育委員会により、市道建設や各種開発工事に伴って広範（約1万m²）な発掘調査が行われている。報告書は未刊。

遺構は方位の違いにより2時期に大別され、上層が寺院跡で、西に少し（9度）傾く。

寺域は、東西約150～200m、南北約200mと推定されているが、寺域を画す遺構は見つからなかった。旧夢前川西岸に、伽藍と集落とが近接して広がる景観が復元される。

塔跡 現在、巨大な心礎のみ残る。1934年頃には、土壇、四天柱礎石、側柱（がわばしら）礎石などが残存していたと記録されるが、発掘調査では基壇の痕跡は確認されなかった。しかし、塔

心礎は動かされていない。

推定講堂跡 塔の北東に礎石建物が存在し、講堂跡と推定されている。基壇は削平されていたが、礎石据付跡と、動かされていた礎石が見つかり、桁行（けたゆき 東西）5間以上、梁行（はりゆき 南北）2間の建物が想定されている。

推定僧坊跡 推定講堂跡北側（現在、道路下）。桁行13間×梁行2間、南面に庇を付けた長大な建物跡で、その構造から僧坊跡と推定された。講堂西側にも僧坊跡が想定されており、多数の僧が居住する地方では稀な寺院であったようだ。

南門跡 桁・梁行とも1間の小型の掘立柱建物で、意外に貧相である。

金堂跡 寺院の最も主要伽藍である金堂跡が見つかっていない。かつて東塔跡かと推測された土壇があり、残存基壇であったかもしれない。

辻井廃寺下層の遺構 一市之郷廃寺との類似—寺院に先行する遺構は7世紀前半のもので、寺院とほぼ同じ範囲に存在する。大型の掘立柱建物が確認され、豪族居館、あるいは官衙（かんが）のような機能をもつ建物ではないかと指摘される。

講堂跡北側には、桁行5間×梁行2間で三面に庇が付く大型建物が、講堂下層には5間×3間、4間×2間、塔跡下層にも5間×2間、2間以上×2間など大型建物が密集して建つ。

市之郷（いちのごう）廃寺 では隣接して先行あるいは同時期の集落遺構が見つかっている。辻井廃寺の場合は寺域そのものが大型建物群跡に建てられており、両寺はそれぞれ地域の有力な氏族集団が主導し寺院を建立したものと考えられる。

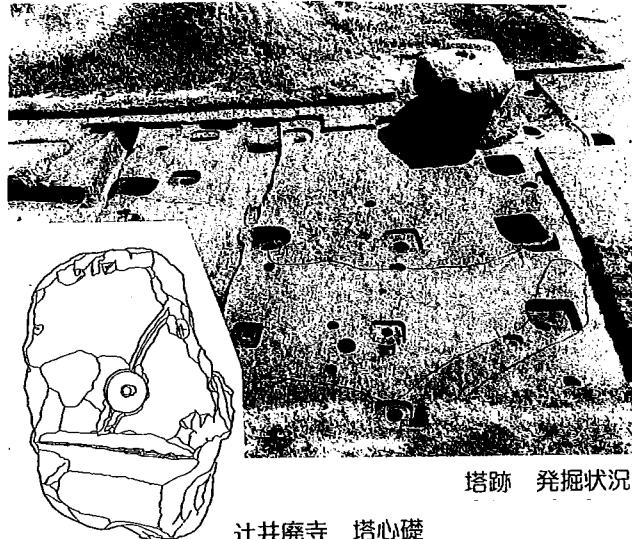
出土遺物

寺、寺に先行する集落、そして川辺での祭祀に関連する遺物が多く出土している。

井戸跡 墨書き器・木簡3点が出土したが、人名は確認できず。ミニチュア砧（きぬた）や丹彩鉄斧など珍しい祭祀具が出ている。

旧河道 河道は徐々に陸化するとともに、堆積物が重なっている。最下層は縄文晩期。上層で木簡、祭祀具、馬鍬（まぐわ）などの農具、工具など木製品が多く出土した。木簡は4点あり、うち1点の表には「難波津の歌」、裏に「己」「知」「屋」など漢字を練習した習書（しゅうしょ）木簡だった。

「己・知」を統ければ「己知（ごち）」になる。



塔跡 発掘状況
辻井廃寺 塔心礎

馬鍬の出土は、家畜を利用する先進的な農業が行われていたことを裏付けるもので注目される。

出土遺物の年代は、7~8世紀と推定されており、下層遺構の時代から水辺の祭祀が行われていたよう、地域の中核とみなせる集落である。

出土瓦・鷲尾（しひ）のネットワーク

辻井廃寺出土の軒瓦はⅠ期・Ⅱ期に大別される。Ⅰ期瓦は、いわゆる川原寺（かわらでら）式系統に分類される複弁八葉（ふくべんはちよう）蓮華文軒丸瓦で、同范（瓦当文様の範型が同じ）例は、市之郷廃寺、赤坂窯跡で見られる。

軒平瓦は重弧文（じゅうこもん）で、三重弧文と四重弧文のものがある。市之郷廃寺で似た文様のものが出ていて、忍冬唐草文は1点しか出土していないが、同范例は揖保郡の下太田廃寺・中井廃寺で、同文（同じ文様だが範型が違う）例が新部大寺（しんべおおでら）廃寺（賀毛郡）で見られ、周辺地域、とりわけ揖保郡の寺院造立集団と相互交流の関係（ネットワーク）が窺える。

Ⅰ期瓦の年代は、7世紀末葉～8世紀前葉頃とされ、従って、寺の創建年代もその頃になる。Ⅱ期瓦はすべて播磨国府系瓦になる。

鷲尾 華麗な蓮華文の飾板で装飾された鷲尾が出土している。この蓮華文帶鷲尾が出土する遺跡は、播磨の揖保・飫磨郡を中心にして、東は山背（大宅廃寺）、摂津（四天王寺・細工谷遺跡）、西は美作（大海廃寺）、伯耆（斎尾廃寺）など12遺跡に達し、広範なネットワークを形成する。

山崎山古墳群 一被葬者と辻井遺跡・寺院一

辻井廃寺の東、八丈岩山の麓に市立姫路高校が見える。山崎山古墳群は学校敷地北側にかつて存在した横穴式石室をもつ7基の古墳群。

築造年代は辻井廃寺下層の集落（豪族居館・初期官衙？）の年代と重なり、辻井廃寺建立集団と密接な関係があると考えられている。

殆どの石室は壊されていたが、残された遺物には馬具等と共に、出土例の少ない渡来色濃い装飾品が含まれ、注目される（図録『渡来人の考古学』姫路市埋蔵文化財センター 2008年）。

釧（くしろ 銀銅製の腕輪）、トンボ玉（2種類以上の色を使い模様を表すガラス玉）、雁木玉（がんぎだま 縞模様のトンボ玉）など、山崎山古墳群の被葬者は、類例の少ない華麗な装飾品を入手できるネットワークを有していたようである。

仮称・今宿廃寺（今宿（いまじゅく）遺跡）

辻井廃寺の真西700mくらい、蛤山の南麓に式内高岳神社が鎮座する。神社は平安時代前葉に八丈岩山から遷ったと伝えられ、神社の本体は屹立する岩盤で、盤座（いわくら）である。案内板に坂上田村麻呂も崇敬したとあった。

この高岳神社の南、新設道路に伴う発掘調査で整理箱1,000箱もの膨大な量の白鳳時代の瓦片が出土した。現場は丘を削った道路で、高岡小学校西の小丘陵の東南側斜面。遺構はない。

窯跡を想定する遺物は含まれておらず、中世以降に耕作地から拾われ瓦片を、岩山の裾に一括廃棄したものと推定された。軒丸瓦・軒平瓦・蓮華文帯鶴尾なども含まれており、軒平瓦には赤色顔料の付着したるものがあり、寺院の存在はほぼ確定的である。寺跡の想定地は調査地の東あるいは東南側で、山陽道に近接する位置である。

軒丸瓦は川原寺系の複弁八葉蓮華文のみで、辻井廃寺の早い時期の軒丸瓦・鶴尾と同文（同范？）と指摘されている。辻井廃寺と同時期に建立され、短期間で廃絶したようである。（『今宿遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会 2008年）。

『峰相記（みねあいき）』（南北朝時代初期に成立した播磨の地誌）には、「安室郷高岳の西の原に草上寺とて……、石すえばかり残れり」とあり、この草上寺が辻井廃寺あるいは今宿廃寺である可能性が高い。今宿廃寺近くには、草上寺（そうじょうじ）という字が明治9年に記録されている。



蒲田山本遺跡（山本廃寺） 唐草文博 唐草文軒丸瓦



田中寺 寺 郡 豆腐町遺跡出土墨書き土器

豆腐町遺跡 館磨郡家関連施設

JR姫路駅と周辺は再開発・高架工事関連で兵庫県教委と姫路市教委による大規模な調査が続いている。前々号で紹介した市之郷廃寺跡も、現在は県立ものづくり大学が建つ。塔心礎は北接する小さな薬師堂に安置されている。

駅構内は江戸時代の地名を探り豆腐町遺跡と名付けられ、館磨郡家（ぐうけ）に関連すると考えられる遺物・遺構が続々出土している。計帳関連の漆紙（うるしがみ）文書、多くの墨書き土器（「三宅」もある）・街路跡・建物跡などがみられ、奈良時代館磨郡の中核的な遺跡である。

「田中寺」「寺」「郡」（墨書き土器）

兵庫県教委が調査した東端の調査地（A区）の旧河道から40点の墨書き・刻書き土器が出土した。その中に「田中寺」という具体的な寺院名が書かれたものがあり、「寺」もあった。「郡」も出土することを勘案すれば、館磨郡内に「田中寺」が存在した可能性が高いと考えられる。近接して市之郷廃寺跡が存在するが、どうだろう（『豆腐町遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会 2007）。

姫路市教委の調査では、奈良三彩の小壺が5点出土しており、豆腐町遺跡内における仏事などの祭事に小壺を使ったものと指摘されている（「発掘調査速報展 2009・2010」姫路市埋蔵文化財センター 2009・2010）。

ところで、播磨国府跡の調査では「田中」と書かれた墨書き土器が報告されている。下半が欠けており、寺なのか、人名か地名か分からぬのが残念だが、関係あるかもしれない（『姫路市史』）。

蒲田山本遺跡（仮称 山本廃寺）

国道2号線姫路バイパスを西へ、夢前トンネル西口を抜けたすぐ北側、夢前川東岸の山所公園を中心とする南北約200mの範囲。

列島では類例の見られない統一新羅の瓦当文様を髪鬚とさせる唐草文軒丸瓦や、同じく唐草文で上面と側面を装飾した博（せん）、瓦、墨書き器、陶硯（とうけん）、施釉陶磁器などが採集されており、古代寺院の可能性が指摘されている。時期は8世紀前半～10世紀中頃。礎石は未確認（『姫路市史』第七巻下 史料編 2010年）。

遺跡の対岸になる白毛（しらけ・しらげ）山の東麓には、6世紀末～7世紀前半の36基以上からなる下野（しもの）古墳群が形成されている。

草上駅家（今宿丁田（いまじゅくちょうだ）遺跡）

辻井廃寺から南へ約1km、国道2号線にぶつかるあたりが草上駅家想定地。船場本徳寺からでは2号線を1.5kmくらい西になる。

調査地は、古代山陽道を踏襲した近世西国街道に南面するそうで、駅家の建物の遺構は見つかっていないが、数百点の瓦が出土したらしい。瓦は播磨国府が関与した播磨国府系瓦で、年代は8世紀中葉～9世紀末前後に相当し、駅家の存在期間にふさわしいとされる。報告書未刊。

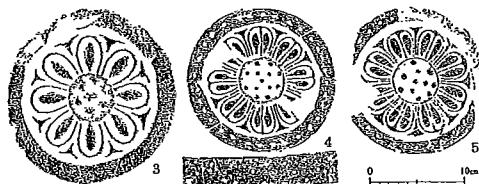
草上駅家は山陽道から分岐する美作道の始点であるとの見方が有力であり、草上駅家からの景観は北の美作道の傍らに辻井廃寺、西には今宿廃寺が望まれ、最先端の景観であったであろう。

草上駅駅子（えきし） 中臣大分等百八十人

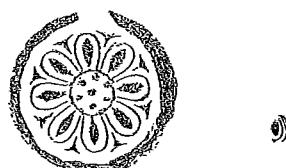
『続日本紀』宝亀四年（773）二月条に、「飸磨郡草上駅の駅戸便田…」とあり、内容は駅子の班田（口分田）を元の場所に戻すというもの。

これに先立つ神護景雲三年（769）、新たな班田の場所が遠く業務に支障があるので戻してくれと言う要望が提出されており、そこに駅子の名前が書かれていた。中臣大分等百八十人だった（「太政官符案」九条家本延喜式裏文書）。

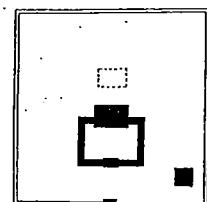
この中臣大分は駅長と考えられ、駅長は里長・郡司クラスの有力者であり、今宿廃寺・辻井廃寺の「知識・壇越」候補である。巨智（己智）ではなく、中臣であったのが意外だった。



奥村廃寺出土軒丸瓦



播磨国分寺出土軒丸瓦



播磨国分寺（国分僧寺）

国分寺（僧寺）は市川東岸に位置し、国府とは3kmばかり離れる。山陽本線御着（ごちゃく）駅の600mばかり西。線路が寺域をかすめており、車内から復元された築地を見ることができる。

この築地に葺かれた軒丸瓦は国分寺の創建瓦を模したもので、国分寺式と呼ばれる播磨国府系瓦のなかで初期に登場する瓦になる。

現地は今も国分寺というお寺が建つが、一帯は史跡公園に整備され、すべての礎石が残る塔の復元基壇、南大门・中門・金堂・回廊などの基壇の表示、西面築地の一部が復元されている。講堂は現国分寺本堂から西側の墓地と重なり未調査。

伽藍配置は双塔伽藍を備えた総国分寺である東大寺（奈良）と基本的には同じであるが、西塔を欠いている。なぜか、全国の国分寺において双塔を備えた伽藍は一ヶ寺も知られておらず、尼寺には塔が造られていない。

飴磨郡の山陽道・主條里は斜行するが（東に2度傾く）、国分僧寺・尼寺周辺のみは方位をほぼ真北にとる。山陽道も国分寺の南面は正方位。国府跡の建物も第2期（8世紀後半～）には方位をほぼ北に変えて造り直されており、この時期、官衙施設の大々的な整備がなされたようである。

創建年代については文献記録がなく、軒丸瓦の年代から8世紀中葉ころと考えられており、全国の国分寺の中でも比較的早い段階になる。

注目されるのは、国分寺建立は播磨国の直轄事業ではあるが、奥村廃寺（揖保郡）の造営集団が国分寺の創建に関わっていることである。天平19年（747）に、造寺に郡司の参入を促す勅が出されているが、裏付けるものといえる。